

くらしと協同を
訪ねて

協同の力で商店街と街の復興を — 気仙沼復興商店街「南町紫市場」の力闘 —

浜岡 政好
(佛教学名誉教授)



気仙沼復興商店街

2013年9月、東日本大震災から2年半近くたったが、被災地の三陸海岸の多くはやっと瓦礫の撤去が終わった程度で、まだ本格的な街の復興には至っていない。しかし、そうした中でも被災地においては、地域の内外の支援を受けながら、協同の力による街の復興がたくましく進められている。今回は「気仙沼 人情商店街」としてNHKスペシャルでも取り上げられた気仙沼市南町の復興商店街「南町紫市場」を訪ね、被災後の避難生活の状況や仮設店舗による商店街の再開、今後の本設の商店街開設に向けての取り組みなどについて、この取り組みの中心を担ってこられた南町柏崎青年会長で、復興商店街副理事長の坂本正人さんとこの復興商店街の理事長で、市場で「あさひ寿司」を営んでおられる村上力男さんから話をうかがった。



坂本正人さん
(復興商店街副理事長)



村上力男さん
(復興商店街理事長)

大災害を生き抜く コミュニティの協同力

復興商店街「南町紫市場」のある気仙沼市の「内湾」地区と呼ばれる魚町・南町は、「船主や廻船問屋の事業所が建ち並ぶ『屋

号通り』や『昭和モダン』と呼ばれる港町
 繁華街の雰囲気伝える町並みが形成され、「気仙沼の顔、中心市街地として、また気仙沼らしい港町文化の発信地」であった。しかし、このたびの巨大津波で気仙沼湾の最奥部にあるこの「内湾」地区は壊滅的な被害を受けることになった。南町の商店街は、1番街商店街、夢通り商店街、銀座通り商店街など大小7つの商店街からなっており全部で160店舗ぐらいあったが、この津波でほぼ消失した。

気仙沼市全体では約1300人近くの死者・行方不明者を出したが、この地域（南町1区～4区、柏崎）ではいち早く高台にある紫神社の紫会館（自治会館）に避難し、被害を最小に食い止めることができた。街の背後にある神社は石段が町中から続いており、逃げやすかったということもあるが、日頃から避難訓練が行われており、またこの神社が祭礼や子どもたちの遊び場として、地域の人びとにとってはなじみの場所であったことも避難を容易にしたといわれている。

この自治会館に地域の人が多い時には150名ぐらいは避難していた。津波の第一波が商店街を押し流すのを見たとき、みんなもうここでは商売はできないなと思った。そして8ヶ月間に渡る避難生活が始まったが、最初の1ヶ月間は孤立して神社



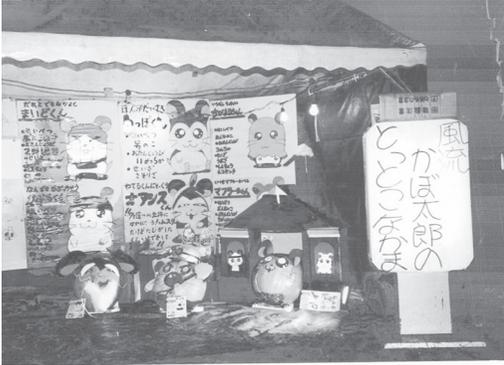
南町自治会避難所記録集より



三陸新報 2011年5月13日

の「紫会館避難所」で集団生活をおくることになった。避難者の中に南町1区～3区の自治会長さんがいたこともあり、この3人の会長さんと神社の祭りの担い手である「南町柏崎青年会」長の坂本さん、それに地区ボランティア協会長を中心に、自治会を母体とする「自律的避難所運営」が行われた。神社から下に降りて、瓦礫の中からいろいろなモノを探したり、家に残ったモノを集めてくるような生活をしていた。このとき「自律的避難所運営」の実戦部隊として、飲料水や食糧を調達したり、ガソリンを調達するなど組織的に活動したのが、この地域の青年団の連合体である「南町柏崎青年会」（約120名参加）であった。

この地域ではまだ5つの自治会ごとに青年会組織が維持され、紫神社の祭礼（カボチャ祭り）では、青年会はカボチャ祭りのカボチャ人形作りや紫まんじゅうの販売、神輿担ぎなど中心的役割を担っていたのである。祭りを通しての青年会と地域住民とのふれあいが既にあり、話はしたことがなくても顔を見たことがあるという関係であったこともあり、震災後の避難所生活においても住民間の地域のコミュニケーションはとれていた。だから何をしても



震災前のかぼちゃ祭りで作成したかぼちゃの人形
(今年も9/14～15紫神社にて祭り開催)

話をまとめやすく、何も無いところから話をもっていっても、じゃやってみるかということになった。こうして青年会の行動力と自治会の主導により避難生活に必要なモノと避難者を支える環境や仕組みを自前で徐々に整えていったのである。こうしたコミュニティの協同力が大災害のもたらした困難を乗り越える大きな力となっただけでなく、その後の商店街の復興や新しいまちづくりの推進力にもなってきたものと思われる。

商店街の再興に向けた 仮設商店街「南町紫市場」の試み

被災後1ヶ月ぐらいした頃から、気仙沼でも幹線道路が通れるようになり始め、被災の程度が少なかった市役所方面では、ぼつぼつ家の前にテーブルを出して弁当や野菜を売るなど商売を始める者も出だした。避難所では情報を共有するために毎日夜8時からミーティングをしていたが、こういう状況を見るにつけ、もう一度南町で商売ができないかの声が出てきた。青年会を中心に何もしていないとだめになる、ここで何か商売がしたい、何かやってみるかという話になった。たまたま坂本さんの奥さ

んが震災前にコロッケ屋をやっており、その移動販売の機材が無事だったのでそれを使ってコロッケ屋をやろうということになった。コロッケだけではということでもこれもたまたま東京から下着を仕入れることができるという話もあり、コロッケと下着の青空市場を開こうということになった。

早速、市役所と交渉して市役所の前の空き地を借りて4月中旬から2店舗で青空市場を始めた。このとき一緒に商売を始めた仲間は7名であった。避難所には他にも商売をやっていた者は多くいたが、避難所でモノをもらって生活している者が商売して良いのかという声もあり参加をためらったのである。コロッケは材料を仕入れるために、中古車から分けてもらったガソリンで岩手県の一関まで行ったが、当初、1週間に2～3回程度営業しようとしていたが、実際に青空市を始めて見ると毎日開けなければならないほどのものすごく売れた。ためらっていた避難所の店主たちもこの様子を見て、青空市場に参加し始め、あっという間に11店舗になった。しかし、雨が降ると青空市場では営業できなくなるので、仮設でもいいから店舗がほしいということになった。

そして商工会議所や市役所と相談して、5月上旬には中小企業基盤機構を活用して仮設店舗を建設できるようにエントリーした。最初の計画では4棟の平屋建て20店舗ぐらいの規模の仮設店舗が構想されていた。これがこの商店街ができるきっかけとなったのである。中小企業基盤機構の仮設施設整備事業というのは、自治体の土地に機構が建物を建てて、それを自治体に貸し出し、それを自治体が事業者に貸し出すという仕組みであるが、気仙沼市には仮設住宅等の建設もあって肝心の市有地がない。そこで坂本さんたちが自分たちで土地を見

つけることになった。やっと使わなくなった銀行の建物を見つけ、ビルを解体して平地にしたら銀行が土地を貸すことに難色を示すなどいろいろ苦労もあった。結局、他の土地を借りるなどして土地は確保し、がれきを撤去して、中小企業基盤機構に相談したら、住宅の基礎部分の撤去は機構はやらないということなので、NPOにお願いして基礎の撤去費用が出してもらったことになった。

当初の計画では「気仙沼復興商店街」のオープンが9月のお祭り頃を予定していたが、こうした難題との格闘や機構の制度運営の規則等もあり、建物の完成は11月末、内装等を整えて、営業開始は暮れも押し迫ったクリスマスイブということになった。このように仮設商店街の完成が大幅に遅れてしまったのは、被災者支援の制度が被災者のおかれた状況とミスマッチしたからであり、また建物の完成後でないと、店舗の内装に取りかかるとはいけないという指導など制度の官僚主義的な運用の結果であると思われる。いずれにせよ、「南町柏崎青年会」の協力の力とNPO等の支援もあって、悪戦苦闘の末に、最終的には52店舗（現在はさらに増えて54店舗）で仮設商店街のオープンにこぎ着けることができた。

しかし、仮設店舗での営業開始が遅れることで店主たちの生活はいっそう厳しいものとなった。特に、この地域に居住してなくて、南町でテナントとして飲食店などの商売をしてきた女性の店主たちには義援金は出ないし、アルバイトの仕事もなかなかで苦しい生活を強いることとなった。こうした店主たちの苦境を少しでも軽減しようということで、「南町柏崎青年会」は店舗開設に必要な冷蔵庫、テーブル、椅子機器等は無償で用意し、また内装費用等も負担し、店主には共益費のみを負担してもらったことになった。共益費も大きな店舗

で1万円以内、小さな店舗で5千円以内と低額にして、店主に負担をかけないやり方にした。オープンまで時間はかかってしまったが、「南町柏崎青年会」のメンバーたちはこうした方法は間違っていなかったと自負している。

仮設商店街の開設や開設後の商店街の運営等を担うために、自治会や青年会の組織とは別に、「南町柏崎青年会」のメンバーが中心となってNPO法人「気仙沼復興商店街」を立ち上げ、そのNPO法人が仮設商店街の開設にあたっての実務や運営等を担当することにした。このようにして南町のコミュニティの協同組織をベースにして、新たに特定の事業や活動を担うための協同組織が作られたのである。このNPO組織が横につながって、他のNPO組織からの支援を受けるなど、仮設商店街開設に当たっての様々な困難を打開してきたことは既に見た通りである。このNPO法人立ち上げにあたって、法人名に「南町」や慣れ親しんだ「紫」という名称を入れたかったが、認められず泣く泣くあきらめたらしい。しかし、やっと復興商店街の愛称にアイデンティティである「南町」と「紫」の2字を盛り込むことができたのである。

さて、地域の人びとや店主たちの期待を担ってオープンした復興商店街は「ほほ、当初の見込みどおり」の賑わいがあり、上々の滑り出しをした。この南町地域にはほとんど人が住んでいない。住宅も商店街も被災して住民の7割はいなくなった。商圈内には気仙沼市内で2番目に大きな仮設住宅もあるが、この仮設商店街はいずれにせよ、住民も店主もここに通って利用する商店街である。当初は仮設住宅など比較的近くに住む住民も顧客として期待していたが、いざオープンしてみると仮設住宅から買い物に来ない。冬季だから出にくいのか、仮

設住宅が坂の上にあるので来にくいのか、などいろいろ分析してみたが、春になっても仮設住宅からはお客が来なかった。震災後1年たって、近くにも大型店が出店するなど被災地の買い物環境も大きく変化してきており、仮設住宅の被災者も震災前と同様にクルマで郊外のスーパーなどを利用しているものと推測した。

当初の方針では炊き出しなどイベント的なものは行わない方針であったが、仮設住宅の住民等を意識して、炊き出しなどを行うことにした。実際に炊き出しをすると、多くの仮設住宅の人びとが顔を見せてくれるようになった。しかし、今の仮設商店街のお客の中心は、観光バスでの復興ツアーのお客、県外からのボランティア関係者、そして復旧工事関係者など地域外の人びとである。こうしたお客の構成に対応できるように、仮設商店街の店舗は平日に交替で休みを取るようになっており、土曜、日曜は店を閉めていない。また地域の人びとにも、地域外の人びとにもこの仮設商店街をアピールし、賑わいを創り出すために、月に1回はイベントを実施してきている。

この仮設商店街の大きな特徴は、前述のように共益費やイベント費用など店舗の維持や商店街全体の活動のための店主の負担を徹底して押さえて、その分お客さんへの商品やサービスを安く提供していることである。そうした努力もあって、現在がこの商店街の全店で震災前より確実に売上げが上がっている。この間の利用は確かに「復興特需」という面もあったが、こうした動きが一過性にならないように、全店共通のポイントカードの発行や観光客に商品券を購入してもらって地元ホテルのレストランで使ってもらうなど今後につながる取り組みにも力を入れている。「南町紫市場」の開設から1年8ヶ月の歩みは、東日本大震

災後にスタートした仮設商店街の多くの苦境が伝えられているなかで、一つの希望ともいえるものである。

街の再建と商店街の再生

この仮設商店街は、最初の契約では2年間限定だったが、復興計画の確定が遅れるなかで3年間に延長された。今後の課題は、これからのまちづくりとそのなかでの本設の商店街の再生である。気仙沼市の南町を含む「内湾」地区のまちづくりや商店街の活性化は、繁栄していた地域が震災で打撃を受け、それを以前のように再生しようというものではない。南町の商店街は魚市場が南部の弁天町に移転して以降、斜陽化し、震災前から既に昼間はシャッター通りになっていた。南町1丁目～3丁目の人口も、1975年と比較すると2011年の被災前で3分の1に減少している。商店が減少するだけでなく、住民も激減していたのである。また住民の買い物行動もクルマで郊外の大店などに買い物に行くというスタイルに変化していた。こうして商店街の店舗の多くは土曜、日曜になるとシャッターを閉め、シャッターが閉まっているからまた余計に人が来なくなるという悪循環に陥っていた。

震災前からのこの街の課題と商店街の問題を解決するような新たな取り組みが始まっている。それは被災以降のこの地域における共通の体験と協同の取り組みを踏まえた、街と商店街の未来への取り組みである。現在、この地域は区画整理事業に入っており、そのなかで店主の意向は以前のように街のなかに店舗がばらばらと点在するのではなく、みんなでまとまって移転し、新たな本設の商店街を作りたいというものである。そのために商店街型のグループ補

助という制度ができたので、それに応募して全体として南町の1角にまとまって移転し、新商店街を形成しようとする計画である。このあたりの地域は危険区域であるため再建する建物は堅牢で、かつ1階は非住居空間、2階、3階以上が住居空間と決められており、この条件を充たして自力再建できる商店主が少ないこともあり、このグループ補助を活用し、計画を成功させることが決定的に重要になっている。

再建した街や商店街の姿は、美しい「内湾」の景観を生かした観光に磨きをかけ、水産業の振興が商店街の活性化につながるような水産観光都市の形である。もちろん人が住む街、安心して住み続けられる街にすることが大前提であり、そのためには地域内に復興公営住宅を呼び込むだけでなく、福祉や教育の施策が充実したまちづくりも重要課題として意識されている。新商店街の魅力を増すために、寿司屋横丁の構想や元の商店主や他地域の商店主などからも多様な参加者を呼び込みたいとしている。この点で仮設商店街における「cadocco（かどっこ）」（被災した薬局の建物を改修して集会スペースとし、子どもたちの活動の場として活用されている）と名付けられた地域の集会スペースの建設と運営の経験



「集まる」・「つくる」・「楽しむ」 フリースペース
cadocco（かどっこ）

は、この商店街の人びとにとってこの種の活動支援が商店街の活性化に結びつくという確信になっており、新商店街でもこの経験が生かされることになると思われる。

まちづくりと商店街の将来ということでは後継者問題がある。後継者のいない仮設店舗の店主のうちには仮設商店街が終われば商売をやめる人もいる。やめる店主にはベテランの店主も少なくないので商店街にとっては大きな損失となると受け止められている。しかし、ここ南町の商店は老舗が多いこともあってか、既に若い世代が跡を継いで後継者がいるお店も少なくない。青年会が活動力を維持してきている背景にはこうしたこともあると思われる。その意味では商店街の将来にとって明るい材料といえる。そして「南町柏崎青年会」を中心とした被災後の困難を青年たちの協力の力で乗り越えてきた経験は、この街と商店街の未来にとってより明るい確かな材料になると思われる。

今後のまちづくりに関わって、今、「内湾」地区では内湾地区復興まちづくり協議会などで浸水した土地のかさ上げ対策と防潮堤問題が協議されており、特に防潮堤の高さをめぐって県と地元関係者との間で熾烈な意見の対立が生じており、区画整理事業など復興事業の進展が遅れている。「内湾」地区は親水性が高く、これまで防潮堤がなかったが、今回の津波による浸水被害を受けて、地域の盛り土かさ上げと5.2mの防潮堤建設計画が県より出されてきている。「津波・高潮に無防備な港町」から「暮らしを守る市街地」へというわけである。これに対して地元ではウォーターフロントの景観が台無しになる高い防潮堤はほしくない、それより避難道路の整備などが優先されるべきではないかななどの意見が根強くあり、その調整が困難になっている。

県の防潮堤の高さへの見解が強固ななかで、南町を含む「内湾」住民の間でも意見が分かれており、合意形成に時間がかかるなかで、復興が遅々として進まないことへの焦りの感情なども出てき始めているように見える。被災生活の困難が長引くなかでの復興のスピードアップへの切実な要望と、復興したまちの将来像をめぐる住民の合意形成の難しさが防潮堤問題として象徴的に現れており、簡単には決着がつかない状況となっている。南町のまちづくりや商店街の将来像とも密接に関連するだけでなく、復興のタイムテーブルとも関わるだけに、地域の人びとは固唾をのんでこの決着の行方を見守っている。

仮設商店街は、今は、外からのお客さんで賑わっているか、これがいつまで続くかはわからない。今の賑わいが続いているうちに観光客など地域外に過度に依存するのではなく、「南町の住民が戻ってきて、この商店街を活性化していただきたい」というまちづくりの夢を現実化すべく、仮設商店街から本設の商店街の再生へと必死の取り組みを進めている。とはいえ、「内湾」地区全体の大きな構図が確定されないままに、南町のまちづくりや商店街の再生事業を、一定の時間的制約のなかで進めなければならないことに、坂本さんたちにも一抹の不安があるようにも見える。最後に、気仙沼復興商店街「南町紫市場」など、東日本大震災の被災地への支援をされている、本誌読者の皆さんに坂本さんから被災地支援への感謝と今後への期待の言伝があった。気仙沼もその他の被災地域も、まだやっとながれきが片付けられただけで、復興にはほど遠い状況にある。こうした状況を見に、ぜひ何度でも気仙沼や被災地を訪れてほしい。被災地域を訪ねることが、被災地域の人びとがまだ自分たちは見捨て

られていないというメッセージにもなる。大震災の被災を風化させないためにもぜひ復興への被災地の取り組みを直接見てほしいということであった。実際に、私たちが「南町紫市場」を訪問しているときにも、秋田県からのバスツアーのお客で、狭い商店街は人であふれていた。



2013年8月22日取材の日に、秋田から観光バスがきていた

(今回の取材には、みやぎ生協専務理事スタッフの五十嵐桂樹さんと気仙沼市在住の元みやぎ生協理事、青空エコカフェ代表の菊池ひろ子さんに同道していただきました。ありがとうございました。)



津波に負けずに残った個人宅の門

気仙沼復興商店街「南町紫市場」



南町紫市場までのアクセス

・JR 気仙沼駅から徒歩で約 20 分



JR

・一ノ関駅 (快速列車) ▶ 気仙沼駅 (約 75 分)

自動車

・仙台 → 東北自動車道 一ノ関 IC ▶ 国道 284 (約 130 分)
 ・仙台 → 三陸自動車道 登米東 IC ▶ 国道 346 (約 125 分)

高速バス

・池袋 → 気仙沼市役所前 (約 7 時間)
 ・仙台 → 気仙沼市役所前 (約 3 時間)



気仙沼復興商店街
 〒988-0015 宮城県気仙沼市浜見山 1-1
 TEL : 090-8612-6031
<http://kesennumafs.com>

788 気仙沼復興商店街



ガイドマップ



南町紫市場お店MAP

全国最大規模 54 店舗の仮設商店街に是非お立ち寄り下さい。

- 食事・喫茶・お酒
- 商業
- 生活関連サービス
- 教育・カルチャー

2F	81 トロに製菓	41 シヤークス	56 赤ライオン	63 就労支援教室	20 一 樓	01 安
1F	38 南町薬局 ナツ美堂	49 ランダー	39 フル	50 オントラ	40 南山精肉店	
	35 サイトウ	36 健康印刷	37 花 久	18 コロク	19 コロク	
イベント広場						
2F	15 American Drats Bar A.	16 Dining Bar HARU				
1F	17 あさひ屋	34 本間屋酒店				

↑ 市役所方面

54 cadocco

2F 45 山田洋行

8 待 夢

29 ひまわり

2F 54 cadocco

1F 30 村野魚店

9 フリダム

10 熊 子

1F 31 塚本八百屋

15 マンボ

14 まるきん

48 コマツ

2F 36 KARUTA

47 リラリ

33 鹿

1F 23 理想産業

44 ラ・モー

24 なか乃

25 YOROZYUA

7 特急寿司

31 塚本八百屋

49 星美谷堂

26 ぶんぶん

11 牛バエ

27 新開園

28 丸入商店

12 世 界

2F 42 クボタ

43 荒州園

1 カブリコン

2 ステール

3 Hope

4 n (エヌ)

5 K

22 ミドリメン

6 ユール

エースポード方面

紫神社

